

四日市市防災マップ

いつ起きても不思議ではありません。

「東海地震」「東南海地震」などの大規模災害に備えて



日本は世界でも有数の地震多発国です。地球上で起きる地震の1/10は日本およびその周辺で発生しており、いつ大地震が起きても不思議ではありません。万全の地震対策を取るためにも、地震について正しく理解しておきましょう。



地震3兄弟

静岡県沖から四国沖にかけての領域を震源として発生するとされるマグニチュード8クラスの巨大地震が、東から順に「東海」「東南海」「南海」と呼ばれる3つの地震です。あの「阪神・淡路大震災」のマグニチュードが7.3であったことから、これらの地震が実際に発生したら大きな被害が出る事が予想されます。このうち、震源域との位置的關係から**本市に最も影響が大きいのが「東南海地震」**で、震度「6弱」の揺れをもたらすとされています。

これらの地震は、過去にもおおむね100～150年周期で繰り返して発生しており、今世紀前半には必ず起きるとも言われています。特に、東海地震が発生するとされる領域では、1854年以降、150年間も発生していないため、いつ起きても不思議ではないと考えられています。しかも、3つの地震はこれまで、同時、あるいは時間的に接近して発生しているのです。



地震の発生確率

	東海地震	東南海地震	南海地震
30年以内	いつ発生してもおかしくない	50%程度	40%程度
50年以内		80～90%程度	80%程度

地震用語解説

マグニチュードと震度

マグニチュードは地震のエネルギーの大きさ(規模)、震度は各地での揺れの大きさを表す。

海溝型地震(プレート境界型地震)

東海、東南海、南海の3つの地震は、いずれも海溝型地震と呼ばれるもの。

一定の周期(数十年から100年前後と比較的短い)で起きるほか、規模が大きく揺れが広範囲に及び、大津波を伴うことが多い。日本列島周辺で起きる巨大地震(マグニチュード8以上)はほとんどこのタイプ。

地震の揺れと木造住宅の被害

震度階級	木造住宅の状況
5弱	耐震性の低い住宅では、壁や柱が破損するものがある。
5強	耐震性の低い住宅では、壁や柱がかなり破損したり傾いたりするものがある。
6弱	耐震性の低い住宅では倒壊するものがある。耐震性の高い住宅でも、壁や柱が破損するものがある。
6強	耐震性の低い住宅では倒壊するものが多い。耐震性の高い住宅でも、壁や柱がかなり破損するものがある。
7	耐震性の高い住宅でも、傾いたり大きく破壊したりするものがある。



想定される四日市市での震度は、東海地震で「5強」または「5弱」、東南海地震で「6弱」です。

なお、平成7年1月17日の阪神・淡路大震災では、神戸市を中心に最大震度「7」、本市での震度は「4」でした。

強化地域と推進地域

いずれも、地震による揺れや津波で著しい被害が生ずる可能性がある地域で、地震防災に関する対策を強化または推進する必要がある地域として国が指定するものです。

「強化地域」は、東海地震による被害を想定しており、県内でも南部を中心に18の市町村が指定されています。本市はこれに含まれていませんが、近郊の名古屋市などは強化地域であることなどから、十分な注意が必要です。これに対して、「推進地域」は東南海・南海地震を想定しており、県内ではすべての市町村が指定を受けています。いずれも、地震による揺れに関しては、原則として震度「6強」以上が予想される地域が対象となっています。



警戒宣言

東海地震は、事前予知が条件次第では可能とされる唯一の地震です。この東海地震の前兆を捉えるため、東海地方には多数の地震観測機器が設置されています。観測データは24時間体制で監視されており、異常が発見されて「東海地震が発生する恐れがある」と認められたときに内閣総理大臣により発令されるのが「警戒宣言」です。なお、これとほぼ同時に、気象庁により「東海地震予知情報」が発表されることになります。

また、「東海地震の前兆現象である可能性が高まった」と認められたときには、「東海地震注意情報」が発表されます。

なお、これらはいずれも、**東海地震に限ったものです**。東南海地震やほかの地震で発表されることはありませんのでご注意ください。



地震による被害を最小限に食い止めるには、日ごろからの準備が大切です。
月に一度は、家族みんなで「防災」について話し合しましょう。

家族防災会議で話し合っておきたい6つのテーマ

1 家族一人ひとりの役割分担



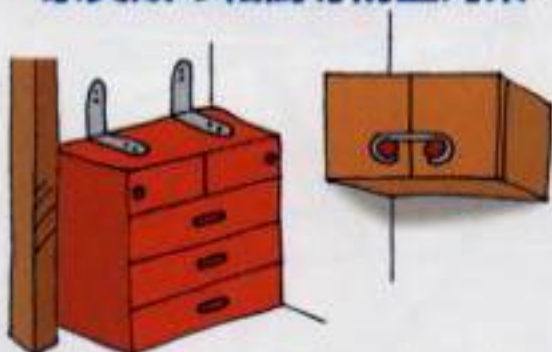
平常時の予防上の役割と、災害発生時の役割の両方を決める。高齢者や病人、乳幼児などがある場合は、保護担当者も。

2 住まいの危険箇所チェック



家の内外をチェックして、危険箇所を確認・報告する。放置しては危ない箇所は、修理や補強の方法について話し合う。

3 安全な空間の確保と家具類の転倒等防止対策



家の中に安全なスペースを確保できるよう、家具の配置変えなどを検討する。また、家具や電気製品の転倒・落下防止策について考える。

4 非常持ち出し品の検討・チェック



家族構成などを考慮して、必要なものがそろっているかをチェックする。定期的に新しいものと取り換える必要のあるもの（非常食、水、乾電池など）は、だれが担当するかなども話し合う。

5 避難場所や災害時の連絡方法の確認



避難場所とそこまでのルートを確認するほか、ルート上の危険箇所のチェックも。また、家族が離れ離れになったときの連絡方法・落ち合い場所を決めておく。

6 地震発生を想定



できるだけ具体的な地震を想定し、その時に各自がどう行動するかをシミュレーションしてみる。心構えが十分できていれば、イザというときに慌てないで済む。

阪神・淡路大震災では、6,400人を超える犠牲者が出ましたが、その大半は家屋の倒壊や家具類の転倒などによる圧死や圧迫死でした。この事実は、住まいの安全対策がいかに大切かを教えています。住宅の耐震化はもちろん有効な地震対策ですが、身近な家具類が一転して凶器になることもあり、家の中の安全対策も重要です。また、ブロック塀やプロパンガスのボンベなど、家の周囲にも注意が必要です。

家の中の安全対策。4つのテーマ

家の中に逃げ場となる安全な空間をつくる

人の出入りの少ない部屋に家具をまとめて置く。無理な場合は、少しでも安全なスペースができるように配置変えをする。



寝室には家具を置かない

就寝中に地震に襲われると非常に危険。特に、子どもや高齢者、病人などは、倒れた家具が障害になって逃げ遅れる可能性があるため注意が必要。どうしても置かざるを得ない場合は、倒れてきても下敷きにならない場所で寝る。



家具は壁や柱にぴったりつけて置く。下に小さな板などを差し込んで、壁などに寄りかかるとよい。また、金具や固定器具を使って転倒・落下防止策を万全に。



家具は倒れにくいように配置し、固定する

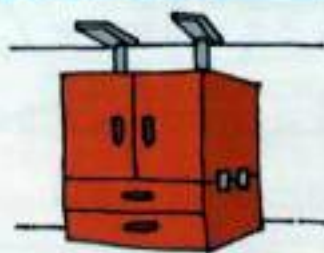


玄関や廊下は、イザというときに逃げ場になる大切な場所。できるだけ家具などを置かないようにする。

出入口や通路に物を置かない

家具の転倒・落下を防ぐポイント

タンス・本棚



L字金具や支え棒などで固定する。二段重ねの場合は、つなぎ目を金具で連結しておく。

食器棚



L字金具などで固定し、棚板には滑りにくい材質のシートやふきんを敷く。扉が開かないように留め金具を付ける。

テレビ



できるだけ低い位置に固定して置く。(家具の上には置かない)

照明器具



チェーンと金具で数カ所固定する。蛍光灯は蛍光管の両端を耐熱テープで留めておく。

市では、建築年など一定の条件を満たす木造住宅を対象に、無料で耐震診断を受けていただける制度を設けています。耐震診断で、まずは自分の家の耐震性を知り、必要ならば耐震改修をするなどの対策を取りましょう。

急いで避難しなければならない場合に備えて、非常持ち出し品を常備しておきましょう。災害が発生したときに最初に持ち出す「一次持ち出し品」と、その後の数日間を自活するための「二次持ち出し品」に分けて用意すれば万全です。用意できたら取り出しやすい場所に置くのはもちろん、使用期限なども定期的に点検することが大切です。また、避難するときのために、ヘルメットや防災ずきんも準備しておきましょう。

一次持ち出し品

災害発生時、最初に持ち出すもの。避難に支障が出ない重さ（男性で15kg、女性で10kg程度）になるように。

懐中電灯



できれば一人に一つ用意する。予備の電池も忘れずに。

携帯ラジオ



小型で軽く、FM付きのものを選ぶ。電池の予備も。

非常食・水



カンパンや缶詰など、調理の必要がないものを。乳幼児がいる場合は粉ミルクなども忘れずに。水は市販のペットボトルが便利。

貴重品



現金（10円玉は忘れずに）、預貯金通帳、印鑑、健康保険証や住民票のコピーも。

救急医薬品



キズ薬、絆創膏、解熱剤、かぜ薬、胃腸薬、目薬など。持病のある人は常備薬や処方箋の準備も。

生活用品



ライター（マッチ）、紙コップ、紙皿、ナイフ、缶切り、栓抜き、ティッシュ、タオル、軍手など。予備のメガネや生理用品、哺乳ビンや紙おむつも必要に応じて。

二次持ち出し品

非常備蓄品

災害から復旧するまでの数日間を過ごすために必要なもの。水や食料は最低でも3日分、できれば5日分を用意したい。

食品



そのまま食べられるか、簡単な調理で食べられるもの。アルファ米やレトルトのご飯、缶詰やレトルトのおかず、インスタントラーメン、切り餅、チョコレート、チーズ、調味料など。定期的に賞味期限を確認しよう。

水



飲料水は大人一人当たり、1日3リットルが目安。ミネラルウォーターの保存期間はペットボトルで2年、缶で3年程度（冷暗所に置いた場合）。さらに、炊事、洗濯、トイレなどに使う生活水の確保も忘れずに。目安は一人1日7リットル。風呂の水は抜かず、寝る前には、やかん・ポットに水を満たす。

生活用品



卓上コンロ（予備のガスボンベも忘れずに）や固形燃料、洗面用具、毛布、寝袋など。

どんなに大きな地震でも、激しい揺れが続くのは1分程度だと言われています。しかし、その短時間での一瞬の判断が生死を分けることもあります。また、その後の適切な行動により、被害を最小限にとどめることも可能です。大地震が起きてもパニックにならずに冷静に行動できるよう、日ごろから自分の行動をシミュレーションしておきましょう。

1 まず、わが身の安全を

何よりも大切なのは命。まず第一に、身の安全を確保する。



2 すばやく火の始末 (慌てず、騒がず冷静に)

調理器具や暖房（器具などの火を確実に消す。



3 ドアを開けて出口を確保

特に鉄筋コンクリート造の中高層住宅では注意が必要。建物がゆがみ、ドアや窓が開かなくなると、脱出できなくなる。



4 火が出たらまず消火

もし、火事になっても、天井に燃え移る前なら消火も可能。できれば消火器を設置しよう。



5 逃げるときは慌てずに

外に出るときは、瓦やガラスなどの落下物に注意するなど、落ち着いた行動を。



6 塀などの危険物から離れよう

ブロック塀や石垣、自動販売機などは倒れやすい。狭い路地では特に注意を。



7 がけ崩れ、津波に要注意

山間部や海岸で地震を感じたら、早めの避難を。



8 避難は徒歩で、荷物は最小限に

避難場所には徒歩で行く。荷物を欲張りすぎると、行動に支障が出る。



9 協力し合って救護活動

お年寄りや体の不自由な人、ケガ人などに声を掛け、みんなで助け合おう。



10 正しい情報で冷静な行動

ラジオなどで情報収集に努め、うわさ、デマに振り回されない。地元の情報は「エフエムよっかいち」(76.8 MHz)で。



地震が起きたからといって、直ちに避難というものではありません。
避難するのは次のようなときです。

いつ避難するのか

- ①家が倒れる危険があるとき
- ②初期消火に失敗して天井まで火が燃え上がったとき
- ③津波や土砂崩れの恐れがあるとき

安全に避難するための心得8カ条

1 避難する前に、もう一度火元の確認。
ガスの元栓、ブレーカーも忘れずに。

2 安全な服を着る。
頭や手足の保護も万全に。

3 荷物は必要最小限に。

4 安否情報や避難先を
書いたメモを残す。

5 必ず徒歩で避難する。
車は厳禁!

6 お年寄りや子どもは、
手をしっかり握る。

7 塀ぎわ、狭い道、
がけや川のそばは、できるだけ避ける。

8 できるだけ指定された避難所へ行く。

